

とりあえず

落語まとめてみた。

試し読み

「良い仕事してますねエ」

最近すっかりお馴染みとなりました台詞で御座居ますが、良い物を見極める目と言うのは、生半な事では身に付かないそうで御座居ます。目の利かない人に持たれたが為に、折角の逸品がまさかと思ふような用途で用いられているのを見た日には、果師も卒倒するやも知れません。とは言え、茶碗や花器などは飾ったり仕舞ったりする為ではなく、本来は使う為に作られた物であります。本来の目的で使用されない器と言うのはある意味可哀想なのかもしれませぬ。

● 猫の茶碗

あちこちを回って骨董品の掘り出し物を見つけては二束三文で買い叩き、江戸の好事家に高く売りつけるのが仕事と言う果師が、諸国を巡り歩いておりましたところ、道端に小さな茶店を見つけました。お爺さんが店番をしております。一休みと茶店に入る事にしました。

「アイ、ごめんなさいヨ」

「あ、いらつしやいまし。どうぞこちらへお掛けなさいまし」

お爺さんがお茶を持ってきました。ふと足元を見ますと、猫がご飯を食べております。果師がいつもの習慣で猫の茶碗を見ますと、これが絵高麗の梅鉢茶碗と言う大変な値打ちもので、好事家には垂涎の品。三百両なら右から左に売れようというしろものです。

(こいつアてエした物だ。それでも、猫に飯を食わせて置くところを見ると、この爺さん茶わんの値打ちを知らねエと見た。よし、なんとかこいつを巻き上げてやるう)

悪い心を起こしまして、猫をひよいと抱き上げて膝に置きます。

「ああ、いい猫だのう。可愛いねエ」

「これこれタマヤ。旦那のお召し物を汚しちゃならねえ。おりろおりろ」

「構うこたアねエ。ひとなつっこい猫だねえ。手前も猫好きだが、ここまで懐いてもらったこたア、ついぞねエ」

「へえ、猫には猫好きがわかると申します」

「手前も前に猫を飼っていたんだが、どこぞへ逃がしてしまった。どうだい、この猫を譲ってはくれねエか？」

「そりや、まア、お前様も途方もねエ事を…」

「いや、只とは言つめエヨ。これまでの鯉節代として三両払おうじゃねエか」

果師は押し付けるように小判を三枚お爺さんに握らせませぬ。

「必ず、大切に可愛がつてくださいませね？」

「ああ。約束しよう。…ときに、手前は旅の途中だから、猫に飯を食わせるときの茶碗がない。猫は食い慣れた茶碗でないと食わねエというから、この茶碗をもらつていこう」

と、何気なく茶碗を手に取ろうとすると、お爺さんがそれを止めました。

「イエイエ、そのう、そつちの皿のほうがよく食べますヨ」

「いや、なかなかそう行く物でもあるめエ。茶碗のほうをもらうよ」

「いえ、その茶碗は差し上げることができませんので」

「なにも、そんな茶碗を惜しむこともないだろう？」

「旦那、この茶碗は絵高麗梅鉢茶碗と申しまして、黙っていても三百両やそこらでは売れますア。手前は若い頃道具の道楽が過ぎた挙句、こんなに身を持ち崩しやしたが、今もこの茶碗だけは手放す

【由来・成立】

民話集「聴耳草子」に原話があるとか。無住法師の『沙石集』、「仏の鼻薰たる事」には、ある女性が出家をして長い法名を付けるという話が見られます。他にも、狂言や民間笑話にも同様の話があるそうです。上方には『長名の倅』という噺があるとか。

【ウンチク】

小学生で寿限無を習うそうで、覚えてたての親戚の子供がひたすらこの名前を繰り返していたのを聞いたことがあります。自分が聞いたサゲはあまりに名前が長すぎて、仕舞いには溺れてしまうものでしたが、今はその前の「こぶが引つ込んだ」で終わるようですね。

噺は、檀那寺で名前をつけてもらうと子供が長生きすると言うことで、和尚さんのところへ訪ねていくところから始まります。

落語では年上で物知り、あるいは知識人といった何かと智恵を貸してくれる人と言う像で描かれるのが、ご隠居、大家、名主、そして和尚さんです。

江戸時代では寺請制度てらうけせいどと言って、全員が檀徒としてどこかしらの寺に所属することになっており、寺の方で名簿を作って幕府に提出していました。また、家族構成とそれぞれの名前、年齢、宗派と所属の寺、家で雇っている下女などの雇い人の数まで記し、後の戸籍とも人口調査の元ともなった、宗門人別改帳しゅうもんにんべつあらためちょうを毎年作成するのが、町名主です。庶民が奉公や結婚などで引越すときや旅行などの場合、檀那寺が確かに当寺の信徒であると保証する寺請請文を出しました。

後の世には一部で破戒僧的振る舞いがあったり、噺の中でも、親

の戒名を付けるのに大金を取られたと父親が文句を言っている所からも判るように、幕府からの寺への締め付けが厳しくなったため経営難から檀家からのお布施を収奪するような行為があったり、他方で金貸しを営みまたそれに伴う問題を起こしたり、借金をして返済で揉めたりと、僧侶のイメージが落ちることもあったようですが、一方で立派な僧侶が存在していたのも確かです。

もともと庶民の教育機関である寺子屋を始めたのは寺でもあったことから、知識人でもあり、人生の節目にかかわってくる存在でもあり、また寺という空間がお参りの他に祭りや勸進相撲、見せ物などが行われる、庶民にとってのレクリエーションの場でもあったことから、良い名前を聞きに行こうかと思える距離感の存在だったのだと思われれます。

どうでもいいけれどこれをひらがなで書くところになります。

「じゅげむじゅげむ」このすりきれかいじやりすいぎよのすいぎようまつうんらいまつふうらいまつくうねるところにすむところやぶらこうじのぶらこうじばいばいぼのしゅーりんがんしゅーりんがんのぐーりんだいぐーりんだいのぼんぼこぴーのぼんぼこなのちようきゆうめいのちようすけ」…記入欄におさめるのも難しい文字数です。

宵越しの金は持たぬ、江戸つ子てエ奴アはきものが新しくて頭がサツパリしていりやあ江戸つ子だ、ともいいます。清明で、いさぎよく、つつましく生きることは江戸の人びとの信条でもありました。こんな話もあればこそ――

● 三方一両損

「あれっ、こんなところに財布が落ちてるぞ。なかには……と、あれっ、三両もへえって（入って）るぜ。こいつは面倒なことになっちゃったなあ……それに、印形に書付けがへえってるぜ。なんだ……神田堅大工町大工熊五郎……こいつが落としやがったんだ。まぬけな野郎じゃねえか。まあ、とにかく届けてやんなくちゃあ……」

と、左官の金太郎、財布を持ち主に返してやろうと神田へと足を向け

「ごめんよおッ」

「いらっしやいまし、煙草はなにを？」

「なにを？ だれが煙草を買って言った。大工の熊五郎てえやつの家はどこだ？ この辺は堅大工町だな？」

「ああ、熊五郎さんの家をおたずねでございますか？」

「じれつてえなあ、そっだよ」

「これへ行きますと八百屋があります。その路地を曲がりますと、長屋の腰障子に熊と書いた家があります。そこが大工の熊五郎さんの家ですから……」

「そのくらい知ってやがって早く教えるい、まぬけえ……ありがとよ」

「なんだい、あの人は……」

金太郎の背中を見送りながら住人が首を捻るのもつかの間、言われたとおり八百屋を曲がって見付けたのが熊の一字。

「ああ、ここだ、ここだ。この家かあ。腰障子に熊としてらあ。いやに煙つてえじゃねえあ。なにしてるんだ？ 障子に穴あけてのぞいてみるか……」

と、勝手に指で穴を開け、金太郎は中をのぞきこむ。中にはでーんと熊がちよいちよい酒をやっていた。財布を落としさぞや気落ちしているだろう、落としたことに気付かないわけはない、こりやあヤケ酒だろうとふんだ。何せ三両は大金だ。

「ああ、あれが熊五郎って野郎だな。ふーん、いつぺえ（一杯）やってるな、鯛の塩焼きで飲んでやがら、飲むんならもつとさっぱりしたもんで飲めッ」

つい言いたくなる。一方、穴を開けられたうえにこの悪態、熊五郎はくるりと振り返り

「だれだ？ ひとの家の障子を破きやがって、家の中のぞいてんのかア。用があんならこつちへへえれッ」

「あたりめえよ。用がなけりやあこんな汚え長屋へえって来るかい。じゃあ開けるぜ」と金太郎も悪びれもなくすぱんと障子を開け入った。

「乱暴な野郎が来やがった……なんだ、てめえは？」

「おれは、白壁町の左官の金太郎てえもんだ」

「金太郎にしちや赤くねえな」

「まだうで（茹で）ねえ」

「なまでもって来やがったな。なにか用かい」

「おめえ、きょう、柳原で財布を落つことしたろう？」

● ケチと鰻屋

ある所にケチな男がおりまして、これがどのくらいケチかってエ
と、徹底的にありとあらゆるものをケチる。

まず、下駄の鼻緒が羽織の紐にしてやがる。次に扇子。一本の扇
子で半分広げて五年使い、破れた頃に、もう半分を広げて五年、都
合十年使う。しかし、ある日これではまだ手荒い。孫・子の代まで
使える方法があると言いつ出した。一体それはどう使うのかと聞けば、
扇子をバツと一面広げて、扇子の方を動かさずに、顔の方を動かすつ
てエ徹底振り。

食べ物となるともつと酷い。上から入れて下から出すのだから、
こんな無駄はないと言って、おかずには塩をつけていた。しかし、
暫くすると塩はやめたという。どうしたと言うと、塩は減るからと
来た。そこで、梅干しを一つお皿において、手には茶碗と箸を持つ。
この梅干しを食べたら、さぞかし酸っぱいだろうと思うと、口の中
に酸っぱいつばが出るので、これをおかずにご飯を掻きこむと言っ
ほどのケチ。

この男が、ある時鰻屋の隣に越してきた。当然時分じぶんどき時ときになつたら、
鰻を焼く良い匂いがする。これは良いと、それをおかずに、ご飯を
食べて、梅干との食い合わせが、なんぞと心配していたってエンだ
から恐れ入る。

そうこうする内に、鰻屋が師走の晦日に請求書持つて来た。

「すみません。鰻代を頂戴に来ました」

「ええ？ 俺アそんなものア頼んでねエぞ」

「しかし、あなたは店から出る鰻を焼く煙でご飯を召し上がってい
るようで、匂いの嗅ぎ代でございます」

男は暫く考え、

「わかった、わかった」

と、財布から細かい銭を出して、チャラチャラチャラツと板の間
に投げ出した。

受け取りに来た方は、「これはどうも」と手を伸ばして受け取るう
とするので、

「俺は匂いだけ嗅いでるんでイ。そつちは音だけ聞いて帰るな」

【由来・成立】

始末の極意、あるいはしわい屋のタイトルもあるため、ケチの出
てくる話の総称とも。

原話は天保八年「落噺仕立おろし」に載っている「しわんぼうに
なる伝」、鰻の部分は、安永九年『大きに御世話』の「蒲焼」が元。

【ウンチク】

うなぎの匂いでご飯を食べるのは、マクラや噺の中でいかにケチ
るか、と言う話の一つで使われるようです。

* お願いとおことわり *

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: [@nedocoya4pr](https://twitter.com/nedocoya4pr)